

# ある恋の話

菊池寛

青空文庫



私の妻の祖母は——と云つて、もう三四年前に死んだ人ですが——蔵前の札差で、名字帯刀御免みよつじたいとうごめんで可なり幅を利かせた山長——略さないで云えば、山城屋長兵衛の一人娘でした。何しろ蔵前の札差で山長と云えば、今で云うと、政府の御用商人で二三百万円まんの財産を擁しておろうと云う、錚々たる実業家に当る位置ですから、その一人娘の——尤も男の子は二人あつたそうです。——祖母が、小さい時からお乳母んぼひがらかさ日傘で大きくなつたのは申すまでもありません、祖母の小さい時の、記憶の一つだと云う事ですが、お正月か何かの宮参りに履いた木履はは、朱塗の金蒔絵きんまきえ模様ように金の鈴の付いたものでしたが、おまけにその木履の胸が削くりぬ貫ぬになつていて、祖母が駕籠かごから下りて木履を履く時には、ちやんとその中に湯を通して置くおと云う、贅ぜい沢たくな仕掛かになつてゐるそうです。ありません。

祖母は、やつと娘になつたかならないかの十四五の時から、蔵前小町と云うかまびすしい評判を立てられたほどあつて、それはそれは美しい娘であつたそうです。が、結婚すは頗ぶる不幸な結婚でありました。十七の歳に深川木場の前島宗兵衛と云う、天保頃てんぼうの江戸の分限者ぶんげんしやの番附では、西の大関に据えられている、千万長者の家へ貰もらわれて行つたのですが、それは今で云う政略結婚で、その頃段々と家運の傾きかけた祖母の家では前宗（前島

宗兵衛)に、十万両と云う途方もない借財を拵こしらえていましたが、前宗と云う男が、聞えた因業屋いんごうで、厳しい督促が続いたものですから、祖母の父はその督促除よけと云ったような形で、又別の意味では借金の穴埋と云ったような形で、前島宗兵衛が後妻を探しているのを幸いに、大事な可愛い一人娘を、犠牲にしてみましたのです。

何でも祖母が結婚した時、相手の宗兵衛は四十七だったと云うのですから、祖母とは三十違いです。それに、先妻の子が男女取り交せて、四人もあつたのですから、祖母の結婚生活が幸福でなかつたのは勿論もちろんであります。その上、宗兵衛と云う男が、大分限者の癖に、利慾一点張の男だつたらしいから、本当の愛情を祖母に注がなかつたのも、尤もであります。その上、借金の抵当と云つたような形ですから、金で自由にしたのだと云う肚はらがありますから、美しい玩具おもちゃか何かのように愛する代りに弄もてあそび苛こんだのに過ぎませんでした。その頃まだ十七の真珠のように、清浄な祖母の胸に、異性の柔やしい愛情の代りに、異性の醜い圧迫おそや怖おそしい慾情などが、マザマザと、刻み付けられた訳でした。が、幸か不幸か、結婚した翌年宗兵衛は安政五年のコレラコレラ大流行(今で云う虎列刺)で、不意に死んでしまいました。

その時、祖母は私の妻の母を懐胎していたのです。何しろ、先妻の子は四人——然しかもそ

の長男は二十五にもなっていたそうです——もある所に、宗兵衛の死後、祖母が止まっ  
 ていると云うことは、まだ年の若い祖母の為にも、先方の為にも思わしくないと云うので、  
 祖母が身が二つになると同時に、生れた子供を連れて離縁になることになりました。宗兵  
 衛の後嗣と云うのが、非常に物の判った人と見え、子供の養育料として一万両と云う可  
 りな金額を頒けてくれたそうです。祖母は、その金を貰って子供を連れて、一旦里に帰っ  
 て来ましたが、子供を預けて再縁をせよと云う親の勧めや又外から降るように来る縁談を  
 斥けて、娘を連れたまま、向島へ別居することになりました。そして、心置きのない  
 夫婦者の召使いを相手にして、それ以来、ズーツと独身で暮して来ました。恐らく最初の  
 結婚で、男と云うものの醜くさを散々味わされた為、それが又純真な傷き易い娘時代で一  
 段と堪えた見え、癒しがたい男嫌いになつてしまつたのでしよう。祖母は向島の小さい  
 穏かな住居で、維新の革命も彰義隊の戦争も、凡て対岸の火事として安穩に過して来ま  
 した。そして明治十二三年頃に、その一人娘をその頃羽振の好かつた太政官の役人の一人  
 である、私の妻の父に嫁がせたのです。祖母の結婚が不幸であつたのと反対に、その娘の  
 結婚は可なり祝福されたものでした。祖母は、間もなくその娘の家に、引き取られて其処  
 で幸福な晩年を送りました。孫達を心から愛しながら、又孫達に心から愛されながら。

×

私が妻の祖母を知ったのは、無論妻と結婚してからであります。その時は、祖母は七十を越えていましたが、後室様と云つても、恥しくないような品位と挙動を持った人でした。私の妻が彼女が一番末の孫に当たっていましたから、彼女の愛情は、当時私の妻が独占していると言ふ形がありました。従つて、三日にあげず、私達の新家庭を尋ねて来ました。美しい容貌ようぼうを持ちながら十八の年から後家を通した人だけあつて、気の勝つた男のように、ハキハキ物を云う人でありました。

何時いつも、車の音が門の前にしたかと思うと、彼女の華はなやかな、年齢よりは三四十も若いような声がしまして、

「又年寄がお邪魔に来ましたよ。若い者同志だと、時々喧嘩けんかなどを始めるものだから」などと、その年齢には丸きり似合わないような、気さくな、年寄にしては蓮葉はすっぱな挨拶あいさつをしながら、どしどし上つて来るのでありました。私は、祖母を人格的にも好きだった上に、江戸時代、殊ことに文化文政以後の頹廢たいはいし始めた江戸文明の研究が、大好きで、その時代を背景として、いい歴史小説を書こうと思つていた私は、その時代を眼で見身体からだで暮して来た祖母の口から、その時代の人情や風俗や、色々な階級の、色々な生活の話の話を聞くことも、

非常な興味を持ちました。祖母もまた、自分の昔話をそれほど熱心に聞く者があるので、自分も話すことに興味を覚えたとみえて、色々面白い昔話をしてくれました。江戸の十じゅう八はち大通だいつうの話だとか、天保年度の水野越前守えちぜんのかみの改革だとか、浅草の猿若町さるわかちようの芝居の話だとか、昔の浅草観音の繁昌はんじやうだとか、両国の広小路に出た奇抜な見世物の話だとか、町人の家庭の年中行事だとか、色々物の本などでは、とても見付かりそうもない精細な話が、可なりハキハキした口調で、祖母の口から話されました。私が熱心に聞く上、時々にはノートに取ったりしたものですから、祖母は大変私を信頼し、私に好意を持つようになりました。妻の姉妹は三人もあつて、銘々東京で家庭を持つているのですが、彼等の共通の祖母が、私の家へばかり足繁しげく来るものですからおしまいには、

『貴方あなたの家だけで、お祖母さんを独占してはいやよ。お祖母さんもお祖母さんだ、青山の家へばかり行つて』などと、妻の姉妹が、不平を滾こぼすほどでありました。

×

もう、その頃は、祖母の話も、段々種が尽きかけて来た頃でありました。ある日私が、

「何か面白いお話はありませんでしょうか。何か少し変つた、お祖母さん御自身がお会いなさつたような出来ごとで」と、少し手を換えて話をねだりますと、祖母は少し考えてい

ましたが、「そうだね。私は、私自身の事で誰にも話さないことがただ一つあるんだよ。生涯誰にも云うまいと思っていたことだが……」と、祖母は、一寸ちよつとそのいかにも均齊の取れた顔を赤めました、「そうだね、懺悔ざんげの積りでそつと話そうかね。綾さん（私の妻の名です）なんかの前では一寸話されない話だが丁度貴君一人だから」と、云いながら、祖母は次のような話を始めました。私は、その話を次ぎに書こうと思いますが、四五年前の話ですから、祖母の用いた口調までを、ソックリ伝える訳には行きませんが、そのお積りで聞いて下さい。

「私は、綾さん達のお祖父さん（それは彼女の夫の前島宗兵衛です）に懲り懲りしたので、もう一生男は持つまいと決心したのです。そして、その決心をやつと押し通して来たが、ただ一度だけ危くその覚悟を破りかけたことがあるのです。恥を云わねば分らないが……」と祖母は一寸云い憎くそうにしましたが、

「自慢じゃないけれど私は、子供を連れた出戻りであつたけれども、お嫁さんの口は後から後から断りきれないほどあつたのですよ。三千石取の旗本の若様で、再婚でも苦しくない、子供も邸やしきに引取つても、差さしつか支えがないと云うような執心な方もあつたけれど、私の覚悟はビクとも動かなかつたのです。娘が、大きくなるまでは、世間とも余り交際しない



積りで、向島へ若隠居をしてしまったのです。その話は幾度もしたけれど——向島へ行つて何年目だろう、私が何でも二十四五になった頃だろう。御維新になろうと云う直ぐ前でしたらうか。私は、自分の暮しが、何となく味気ないような淋しいように思い始めて来たのです。それで、やっぱり家にばかり、引込んでいるから、退屈をするのだらうと思つて、その頃五ツか六ツになった娘を連れて、よく物見遊山ものみゆうざんに出かけるようになったのです。今までは世間からなるべく離れようとした私が、反対に世間が何となく懐なつかしく思われて来たのです。その頃です。私はある男を——この頃の若い人達の言葉で云えば——恋するようになったのです。笑つちやいけませんよ。お祖母さんは懺悔の積りで話しているのですから。その男と云うのは役者なのです。後家さんの役者狂いと云えば、世間に有りふれた事で、お前さん達も苦々しく思うでしょうが、私のは少し違つていたのです。私が恋したその役者と云うのは、浅草の猿若町の守田座——これは御維新になつてから、築地つぎしに移つて今の新富座しんとみざになつたのですが、役者に出ていた染之助と云う役者なのです。若衆形かしゆがたでしたが、人気の立たない家柄もない役者でしたが、何故かこの役者が舞台に出ると、私はもう凡ての事を忘れて、魂を抜かれたような、夢を見ているような、心持になつてしまふのです。何でもこの役者は、大谷友右衛門ともえもんと云う上方かみがたの千両役者、今で云えば

鴈治郎と云つたような役者の一座で、江戸に下つたのだが、初めは、江戸の水に合わなかつたと見えて、舞台へ出てもちつとも見物受がしないのです。どんなに笑つても、きつと顔の何処かに憂の影が、消え残っていると云つたような淋しい顔立が、見物には受けなかつたと見えるのです。また、この役者の動作が、何処までも質素なのです。当り前の旧劇の役者が、怒る時は目を剥いたり、泣く時は大声で喚めいたり、笑う時には小屋を揺がせるような、高声を出す代りに、この役者は泣く時も笑う時も怒る時も質素で、心から泣いたり怒つたり笑うたりする有様が、普通の人が泣いたり笑うたりするのと少しも違わないです。其処が、私の胸にピツタリ響いて来たのです。其処がその頃の見物には、少しも受けなかつたところだったのですが」

「今じゃ、そう云う演り方を、写真主義と云うのです。そう云う役者を見出したお祖母さんは、さすがにお目が高かつたですね」と、私は心から感心して云つた。「貴君のように冷かしてくれては、困るが、何しろ、この役者が見物に受けなければ受けられないほど、私はこの役者に同情するようになったのです。この役者の芸を見てやるのは、私一人だと云う気になつてね。何でも、この役者を初めて見たのは、鎌倉三代記の三浦之介をしていた時だったが、私の傍に居る見物は、皆口々に悪口を云っていたのですよ。『上方役者はてん

で型を知らねえ。あすこで、時姫の肩へ手をやるつて法はねえ』とか『音羽屋（その頃は三代目菊五郎だった）の三浦之介とはお月様と泥鰌だ。第一顔の作り方一つ知らねえ』とかそれはそれはひどい悪口ばかり云つていました。が、私は型に適つているかどうかは、知らなかったが、染之助の三浦之介は、如何にも傷ついた若い勇士が、可愛い妻と、君への義理との板ばさみになっている、苦しい胸の中を、マザマザと舞台に現しているようで、遠い昔の勇士が私の兄か何かのように懐しく思われたのでした。それ以来、私は毎日のように守田座へ行きたくなつたのです。それで浅草へお参りに行くと云つては、何も知らない頑是がんぜのない綾ちゃん達のお母さんを、連れて守田座へ行つたものです。それも一日通しては見ていられないから、八つ刻じやくから——そう今の二時頃ですが、染之助の出る一幕二幕かを見に行つたのです。終には子供を召使いに預けて、自分一人で毎日のように出かけて行くようになりました。そうなつて来ると、今までは何とも思わなかつた自分の美しいと云う評判が、嬉しくうれ思われて来たのです。何だか容貌きりよう自慢のようですが」と、祖母は、一寸言葉を澁よじませました。私はそう云う祖母の顔を見ながら、二十四五の女盛りの祖母を想像してみました。すると、私の眼の前の老女の姿は、忽ちたちまに消えてしまつて、清長きよながの美人画から抜け出して来たような、水もたるるような妖艶ようえんな、町女房の姿が頭の中に歴ありあ

々と浮びました。

「その頃まで、自分が美しいと云う噂を聞いても、少しも嬉しいとは思わなかったが、その頃から、自分が美しく生れたことを欣ぶような心になって来たのです。まあ、染之助に近づく唯一つの望みは、自分の容貌だと思ったものですからね」

「ところがね」と、祖母は急に快活らしい声に変わったかと思うと、「染之助の素顔を、一度でもいいから見たい見たいと思つていた願が叶つて、外ながら染之助の素顔を見たのですよ。ところが、その素顔を一目見ると、私の三月位続いた恋が、急に醒めてしまったから可笑しいのですよ。その日も、私はたった一人、娘も連れずに守田座へ行った帰り少し遅くなったので、あの馬道の通りを、急いで帰つて来たのですよ、すると、擦れ違った町娘が『あら染之助が来るよ』と、云うじゃないか。私は、その声を聞くと、もう胸がどきどきして、自分の足が地を踏んでいるのさえ分らない程に、逆上せしてしまったのですよ。それでも、こんな機を外しては、又見る時はないと思つたから、一生懸命な心持で、振返つて見ましたよ。ところが、私の直ぐ後に、色の蒼さめたと云つても、少しどす黒い頬のすぼんだ、皮膚のカラカラした小男が歩いて来るじゃないか、私はこんな男が、あの美しいおっとりとした染之助ではよもあるまいと思つて、その男の周囲を探して見たけれども、

その男の外には、樽拾いたるのような小僧と、十七八の娘風の女とが、歩いて来るばかりで、染之助らしい年配の男は、眼に付かないのですよ。私は、染之助の事ばかりを考えていたので、娘の言葉を聞き違えたのであろうと、内心恥しくなつたけれど、念のためだと思つたから、その色の蒼い小男の後をついて行つたのですよ。すると、その男は観音様の境けいだ内へ入つて、今仲見世のある辺にあつた、水茶屋へ入るじゃないか。私も何気ない風をして、その男の前に、三尺ばかり間を隔おいて腰をかけたのです。男は八丈の棒縞ぼうしまの着物に、結城紬ゆうきつむぎの羽織を着ていたが、役者らしい伊達だてなところは少しもないのですよ。私はきつと、人違いだと思ひながら、何気なく見ていると、物の云い方から身の扱こし方まで、舞台の上の染之助とは、似ても似つかぬほど、卑しくて下品で、見ていられないのですよ。こんな男が、染之助であつては堪たまらないと思つてみると、丁度其処へ三尺帯をしめた遊人らしい男が、二人連で入つて来て、染之助を見ると、

『やあ！ 染之助さん、芝居の方はもう閉場はねましたかい』と、云うじゃないか。私は身も世もないように失望してしまいました。染之助の美しさは、舞台の上だけのまぼろしで、本当の人間はこんなに醜いのかと思うと、私は身を切るように落胆したものですよ。すると、その遊び人のような男が、

『どうです、親方。花川戸はなかわどの辰親分の内で、いい賭場とばが開いていますぜ』と云うじやありませんか。これで見ると、染之助という男は、こんな男を相手に賭博とばくを打つような身持の悪い男だと分りました。私は、悪夢が醒めたような心持で、怖いもの汚らわしいものから、逃のがれるように逃げ帰ったのです」

「まあ、それでよかった。もし、お祖母さんが、そんな役者に騙だまされでもしたら、綾子なんかはどうなっていたかも知らない」と、私はホツとしたように云いました。

「ところが、まだ後日譚ものがたりがあるのですよ。……その日、私は家へ帰ってから、つくづく考えたのです。私が恋しいと思っていたのは、染之助と云うような役者ではなく、染之助が扮ふんしている三浦之介とか勝頼とか、重次郎とか、維盛これもりとか、ああした今の世には生きていない、美しい凛々りりしい人達ではなかったかと、そう思うと、我ながら合点が行ったように思うのでした。お祖父さんに、散々苛めいじられて世の中の男が、嫌いやになった私は、そう云う舞台の上に出て来る、昔の美しい男達を恋していたのかも分らなかったのよ。私は、そう思うと、素顔の染之助の姿が堪らない程嫌になつて、日参のように守田座へ行つたのが、気恥しくなり、それきり守田座へは足踏みしなくなったのです」と、祖母は話を終りそうにしました。

「それぎりですか。それでもう、染之助とか云う人にはお逢いになりませんでしたか」と、私が後を話させるように質問しますと、

「だから、後日譚があると云つたじやありませんか。半年ばかりは、守田座へ足踏みしなかつたのですが、ある日の事娘が、

『お母さん、この頃はちつとも、お芝居に行かないのね。昨日、お師匠様の所で聞いたのよ。今度の守田座はそれはそれは大変な評判ですつてね』と、云うじやありませんか。娘を踊りのお稽古けいこにやつてあつたのですが、そこで芝居の噂を聞いて来たらしいのです。素顔の染之助を見た時に感じた不愉快さが、段々醒めかかつていた頃ですから、私は芝居だけ見る分には、差さ支しえつかはあるまいと思つて、娘を連れて、守田座へ行つて見たのです。

芸題は忠臣蔵の通しで、染之助は勘平をやっているじやありませんか。私はあの五段目の山崎街道のところで、勘平が——本当は染之助が、鉄砲と火繩とを持って花道から息せき切つて駆けつけるのを見た時に、アツとばかりに感歎してしまつたのです。あの馬道の通りで見た、色の蒼黒い、頬のすぼんだみすぼらしい男の代りに、如何にも零落おちぶれた武士にあるような、やさしみと品位とを持った男が一生懸命な心持で、駆け付けて来たありさまが、何とも云えず、美しく勇しく私の胸に映つたのです。馬道で見た染之助の素顔のみに

くさなどは、何処かに消えてしまいました。私は染之助の勘平を一目見ると、忽ち昔と同じような有頂天な、心持になってしまったのです。それからと云うものは、又毎日のように染之助を見に行きました。今度は染之助に惚ほれているのではない、染之助の扮している芝居の役々に惚れているのだと、自分でもよく判わかっていましたから、私は守田座へ毎日のように通うのが、少しも恥しいと思われませんでした。前よりも、おっぴらに、誰に遠慮も入らないと思いましたが、平土間の成るべく舞台に近い、よい場所を買切つて毎日のように通いました。三度に一度は、娘を連れて行きましたが、しまいには娘の方で、飽きてしまつてついて来ないのを、結句仕合せに思いました。そんなに毎日通う上に、染之助が舞台に出る時間に定きまつて這はい入つて行き、染之助の出る幕が済んでしまうと、サツサと歸つて来るのですから、到頭芝居の中でも、評判になつてしまつたのです。あの女客は、成なりこま駒屋（それは染之助の屋号です）に気があるのだと、評判しているらしいのです。そう云う噂が立つに従つて、舞台の上の染之助がじつと私の方を見詰め始めたのです。私は舞台の染之助から見詰められる事は、三浦之介なり、勝頼なり、勘平なり、義経なり、昔の美しい人達から、見詰められるような気がして、少しも悪い気持はしないのです。その中に段々染之助の見詰め方が烈はげしくなるのです。ただ、あの女は『俺のひいき客だから、



見てやれ』と云う位ではなさそうなのです。日が経つにつれて、染之助の私を見詰めている眼付が、火のように燃えて来るのです。私は意外に思わずにはいられませんでした。そうして、私と染之助とは、舞台の上と下とで、始終じつと見詰め合いました。両方で見詰め合いました。私の見詰めているのは、染之助ではなくて、三浦之介とか重次郎などと云う昔のまぼろしの人間だったのですが、染之助はそうは思わなかったらしいのです。

ある日の事、私が無気なく見物していますと、一人の出方が、それはそれは見事なお菓子、今のような餅菓子ではなく、手の入った干菓子の折に入つたのを持って来て、

『これは、染之助親方からのお届物です』と云うのです。私はそれを聞いた時、舞台の上の美しい齋世宮——その時は、菅原伝授手習鑑すがわらでんじゆてならいかのみが芸題で、染之助は齋世宮ときよのみやになつていたので——のまぼろしが消えてしまつてその代りにあの馬道で逢つた蒼黒い、頬のすぼんだ小男の面影が、アリアリと頭の中に浮んだのです。その瞬間、私は居たたまらなような不快を感じて、幕が閉ると、逃げるように小屋を出ました。無論、その干菓子などには、見向きもしませんでしたよ。

そんな事があつてから、半月ばかりの間は守田座の木戸を潜くぐらなかつたよ、又その中に何となく染之助の舞台姿が恋しくなつて来るのですよ。何でもその年の盆興業でした。馬ば

琴きんの八犬伝を守田座の座附作者が脚色したのが大変な評判で、染之助の犬塚いぬづか信乃しのの芳流閣の立ち廻りが、大変よいと云う人の噂でありましたので、私はまた堪らないような懐しさに責められて、守田座の木戸を潜つたのでしたよ。平土間のいつもの場所に坐っていると信乃になつた染之助が、直ぐ私を見付けてしまいました。それは、長い間母に別れていた幼児が、久し振りに恋しい母を見付けたような、物狂わしいような、それかと云つて、直ぐにも涙が、ほとびそうな不思議な眼付でありました。私は半月も来なかつたことが、染之助に対して、何となく濟まないように思つた位でした。染之助の信乃は、相手の犬いぬ飼かい現げん八ぱちと、烈しい立ち廻りをしながら、隙すきのあるごとに私の方へ、燃ゆるような流なが瞥かめを送つて居るのですよ。実際の染之助から、こんなに度々たびたび、見詰められては、一分も座に居られなかつたに違いない私も染之助が信乃になつて居るばかりに、何だか信乃の恋人の浜路はましにでもなつたように、信乃から見詰められる事が胸がわくわくする程嬉しかったのですよ。私も、信乃から見詰められる度に、じつと見返したり、時にはニツコリと笑つて見せたり、恋人から見詰められたと同じように、うつとりとなつていたのです。

やがて、幕が下つてから、手ちようず水すいを使いに廊下へ出ると、氣の付かない間に、私を追いかけて来たらしく私の用をしていた出方が、

『もし奥様、ちよつと』と云うじやありませんか。元来私は後家暮しはしていたものの、髪を切らないばかりでなく、勝山かつやまに結つたり文金の高島田に結つたりしている上、それで芝居に出這入ではいりするようになってからは、随分意気な身装みなりをしていたから町家の奥様とも見えれば、旗本のお妾めかけさんのようにも見えたのでしようよ。私が、

『何か用かい』と立ち止つて聞くと、出方は声を低めながら、

『あの染之助さんが、是非一寸奥さんにお目にかかりたいと云うのですが、……』と、モジモジ揉手もみでをしながら云うのでした。もし、その時、出方が『あの犬塚信乃さんが』とでも云つたら、私は二つ返事で会いに行つたかも、知れなかつただけけれど、染之助と云うと、直ぐ馬道であつた色の蒼黒い小男の顔が、アリアリと眼の前に浮んで来て、逢う気はしなかつたのですよ。私は、可なり冷淡に、

『何の御用か知りませんが、御免を蒙こうむりたいと云つておくれでないか』と、云いました、舞台姿はあんなに私の心を囚とらえていながら、役者その人は恋しいとも何ともないのでした。出方は、私の顔を見て呆氣あつけに取りられていたようですが、そのままスゴスゴと行つてしまいました。

それから、私は狂言の変り目毎に、三四度は欠かさずに、見物していました。見物す

る毎に、染之助が、私を見詰める瞳が益々熱して来るのに気が付きました。余り染之助が私を見るので、私の傍に坐っている女客達が私に可なり烈しい嫉妬を見せる程になりました。が、私と染之助とは、一度も逢つたことはないのです。染之助の方でも、私が彼の言伝をきつぱりと断つてから、私の心が測りかねたものと見えて、もう少しも手出しをすることはありませんでした。が、私は染之助こそ、嫌つていたが、染之助の扮した芝居の中の若い美しい人達が私を見詰める時には、恋人に見詰められたような嬉しさを感じて、じつと見詰めかえしていたのでした。

丁度私が、二十六の年の十月でした。染之助の居る一座は、十月興行をお名残りに上方へ帰つて、十一月の顔見世狂言からは、八代目団十郎の一座が懸ると噂が立ちました。私は、二年近くも、馴染を重ねた染之助の舞台に、別れねばならぬかと思うと、今まで自分の眼の前にあつた華やかなまぼろしが、一度に奪い去られるような淋しさを感じました。が、その噂は、時が経つに連れて本当だと云うことが分りました。

私は、お名残だと思つたものですから、その興行は、二日隔き位に足繁く通いました。その時の狂言は、義経千本桜で、染之助はすし屋の場で、弥助——実は平維盛卿になっていました。私は、あの召使に身を窶しながらも、溢れるような品位を持つ

た維盛卿の姿を、どれほど懐しく見守ったことでしょう。私は、維盛卿に恋をするすし屋の娘をどれほど、羨うらやましく思つたでしょう。しかも、私はこの維盛卿が、私の眼に写る染之助の最後の姿だと思つたと、更に懐しさが胸に一杯になるのでした。

ところが、この狂言が段々千秋楽に近づく頃でした。染之助の舞台姿に別れる私の悲しさが、段々私の小さい胸に、ひしひしと堪こたえて来る頃でした。私がある日、すし屋の幕が終ると、支度もそこそこに帰りかけると少しも顔馴染のない役者の男衆らしい男が、私を追っかけて来て、

『染之助親方が、これは御ひいきに預りましたお礼のしるしに、差上げる寸志でございませうから、まげてお受納下さいますようと申しておりました』と、云いながら、紫むらさき縮ちぢりめ緬めんの小さい袱紗包ふくさづつみを出すのでした。染之助と云う役者には、少しも興味の無い筈はずの私も、やっぱり染之助の舞台に、名残が深く惜しまれたためでしょう。無言で黙礼しながら、その袱紗包もらを貰いました。何か染之助の紋の入った配り物だろう位に、思つていたものです。が、家へ帰つて来て、開けますと、中から出たのは、思いがけなく一通の手紙でした。それには、役者とは思われない程の達筆でこまごまとかいた長い文句がありました。もうたしかな事は忘れてしまつたが、何でもこのような意味の事が書いてあつたのでした。

過ぐる二年あまりの年月の間に、貴女様はその美しい二つのお眸で、私を悩み殺しにしようとなさいました。貴女は私を恋していて下さるのでもなければ、それかと云って憎んでおられるのでもない。ただ長い間、私を弄もてあそんでおられたとより外には、考えようもありません。初め、愚な私は貴女が私を恋して下さるものだとばかり思つて、どれほど自分自身を幸福な人間だと、考えたことでしょう。私は、見物から、余り喝かつさい采も受けませんでした。貴女の二つのお眸が、私の動作を、じつと見ていて下さるのだと思つと、千人の見物から喝采せられるよりも、どれほど嬉うれしかったか知れません。その中に、私自身貴女の眸の力が、私の心の奥深く日に増し、貫いて来るのを感じました。私は、役者として長い間、色々な女性にも接して来ましたが、貴女ほどの美しさを持った方に一度も逢あつたことがないように、思い始めたのです。何時いつの間にか、私は貴女をお慕い申すようになっていたのです。私は貴女のお姿が見えない時は、見物席がどんなに一杯であろうとも、芝居をするのに少しも力が入らないのです。又それと反対に、どんなに入りが少ない時でも、貴女のお姿が平土間の一隅いちぐうに見えますと、私は生れ代つたような力と精神とで、私の芸を演じました。そして、私の動作につれて貴女のお眼の色が、輝いて来るのを見て、どんなに幸福を感じたでしょう。私が舞台の上で歎けば、貴女も

お歎きになり、私が舞台上で笑えば、貴女もお笑いになるのを見て、私はどんなに嬉しく思つたでしょう。私は、貴女が私を愛して下さることと信じて疑いませんでした。

そして、貴女が私に恋を打ち開けられるのを、じつと辛抱して待つていました。が、私の期待は外ずれて、貴女は仲々その堅い蕾を、お開きにならないように、私には思われたのでした。私は、到頭自分自身の方から、切ない恋を打ちあける手段を取りました。

ところが意外にも、それは貴女に依つて手酷い、少しの同情もない、拒絶にあつてしまつたのでした。私は、大變な思違ひをしたと思ひました。私は、貴女が私を愛して下さるものと、そのとき思い詰めていたのでした。貴女が、私を見詰めて下さると思つたのは、皆自分の迷いで、普通の見物が役者を見詰めるのと同じ意味で、貴女も私を見詰めておられたのだと思うと、私は自分の思違ひが、穴にでも入りたいうように、恥しく思われたのです。私はその事があつて以来、暫く貴女のお姿が、見物席に見えなかつたので、愈々私の思い違ひを信じ、貴女が私の無礼をお怒りになり、あれきりお姿をお見せにならなくなつたのではないかと思うと、私は身も世もないような、深い失望と嗟嘆とに暮れてしまいました。その当座と云うものは、私はよく動作を間違えたり、台詞が誤つたり気の短い座頭から、よく『間拔め！ 氣を付けろ！』と云つたような烈しい

言葉を浴びせかけられたりしました。が、私は急に魂を奪われた人間のように、藻抜もぬけの殻の肉体だけが、舞台の上で操人形あやつりのように、周囲の人達の動くのに連れられて、ボンヤリ動いていたのに過ぎませんでした。世間からは、男地獄のように思われている俳優の一人である私は、今までも随分恋もし、女も知っているのではありますが、私の心の底までも動かして、強い一生懸命の恋をしたのは、これが初めてでございます。しかも、私はその懸命必死な恋に、破れた訳でありますから、その当座はかように落胆失望致したのも、無理はございません。ところが、いかがでございましょう。貴女の事を段々思いきり、貴女が私を思つて下さると思つたのは、私の飛んでもない心得違いだったと、漸よつやあきらく諦めかけていた時でした。私はふと——左様でございませう。あれは確か、私が八犬伝の信乃で舞台へ出た時であります——見物席の方を眺めながますと、何時もととは異ちがつて、平土間の見物席の辺あたりが神々こうこうしく輝いているように思つたのであります。これは私が大仰に申すのではありません、実際に私はそう感じたのであります。あああの御婦人が来て下さつたなど、私は直ぐ感づいてしまいました。私は犬飼現八と立ち廻りまわりしながら、隙ひまを窃ぬすんで、見物席の何時も貴女が、坐つていた辺りを見ますと、私の感じは私をあざむいてはおりませんでした。小石のようにゴタゴタ打ち並んだ客の中に、夜光



の球のように貴女のお顔が、辺を圧してとも申しましようか、白々と神々しく輝いて  
 たではありませんか。しかも、あの二つのお眸が美しい私の身に取っては、懐なつかしさこの  
 上もない光を放つて、犬塚信乃になった私の身体からだを、突き透すほどに鋭く、見詰めてお  
 られるではありませんか。それは、明かに恋の瞳ひとみです。恋に狂っている女の瞳です。私  
 は貴女から手酷く拒絶せられたのを忘れて、やっぱり貴女は私を思っていて下さるのだ  
 と、考えずにはいられませんでした。が、あの日私が又々無ぶしつけ賤を申して、貴女様から、  
 手酷く拒絶されたことは申上げますまい。が、その後も貴女様は毎日のようにお見えに  
 なりますので、私の無な賤な申出が、貴女の氣に触さわつたので、貴女が私を思つて下さる事  
 には変りはないのだと、私はホツト安堵あんどの胸を撫なでずにはいられませんでした。時期を  
 待たねばならぬ。貴女が自然に私にお心を、打明けて下さるまで、静に待つているより  
 外はないと私は覚悟を決めて、それ以来は、ただ舞台の上だけからじつと貴女を見詰め  
 ていたのです。その時から、もう一年半になります。その間、貴女の私を見詰めて下さ  
 るお眸は段々輝いて来るばかりで、今にも今にも貴女のお心の中の思は、張り裂けるだ  
 ろうと、私は考えずにはいられませんでしたのに、貴女は御熱心に舞台の上の私を見詰  
 めて下さるだけで、一寸も一分も私に近づこうとはなさらないのであります。私はこの

頃では、貴女のお眸の謎なぞに苦しめられない日はなくなりました。それは、恋の眸ではないのか、ただ上部だけで私の心を悩なやまし焼きつくしても、その底には少しも温味も慈悲もない偽のまどわしの眸であつたのかと、私は思い迷うようになりました。私は、この頃では貴女に見詰められることが段々苦しくなりました。貴女のお眸の謎が、私の心にも身にも、堪たえられないほど、重々しくヒシヒシと懸たつて来るのです。私は一日もこの重さに堪えられなくなりました。ところが、今度思いがけなく一座が、京の方へ上る事になりました。段々、出立しゅったつの日が近づいて来るのであります。私は江戸に深い執着も持つていませんが、ただ貴女のお眸の謎を——貴女の本当のお心持を——解かないで、江戸を去るのが、如何いかにも心残りであります。今まで、私の舞台をあれほど、見物して下さつたお情に、ただ一度でもよいから逢つて下さいまし。そして、貴女のお口から、貴女の本当のお心を話して下さいまし。私は、貴女のお口から、お前を愛していたと、云う言葉だけを聞けば、私はそのお言葉を、何よりの餞別せんべつとして、江戸を去る積りです。又、貴女のお口から、お前を愛してはいなかつた、と云うお言葉を聞いても私はやつぱり、何よりの餞別として、江戸を去りたいと思うのです。どうか、私の一生の願を聞いてやると思おぼしめ召して、ただ一度で宜よろしゅうございますから、お目にかかるこ

とは出来ませんか。

まあ、こう云つたような意味が、それはそれは長たらしい文句で書いてあつたのです」「それでお祖母様も、到頭お会いになつた訳ですね」と、私が聞きますと、祖母はうつとりと、昔を思い出したような眼附をしながら、

「会つたことは会つたのです。向うも、やつぱり私の心持が、少しは分つたと見え、芝居茶屋の二階へ舞台姿の維盛卿でやつて来たのです。私は蒼黒あおくろい頬ほおのすぼんだ小男の染之助の代りに、美しい維盛卿と逢つたのだから、先方が神妙に控えている中うちは好かつたけれど、その維盛卿が私の前で手を突いて、何かクドクドと泣いたり口説いたりするのを聞いてみると、維盛卿の姿の下から、あの馬道であつた、染之助の卑しい姿が覗のぞいているような気がして、真身に相手になつてやる気は、どうしても起らないので、私はいい加減に切り上げて歸つたが、先方ではヒドク落胆していたようだったがね」

「それから、どうになりました」私は話の結末を聞こうと思ひました。

「それきりでした。京へ行つてからはどうなつたか、丸きり消息はありませんでした。もつと尤も御維新のドサクサが直ぐ起つたのですからね」と祖母は昔を想ひ出したような、懐旧的な情懷に沈んで行つたようでありました。私は、祖母の恋物語を聞いて、ある感銘を受け

ずにはいられませんでした。役者買とかをする現代の貴婦人と云ったような階級とは違って、祖母が役者の醜い肉体には恋せずして、その舞台上の芸——と云うよりも、その芸に依って活いかされる、芝居の人物に恋していたと云う、ロマンチックな人間離れをした恋を、面白く思わずにはいられませんでした。世の中に生きている、醜い男性に愛想を尽かした祖母は、何時の間にか、こうして夢現の世界の中の美しい男に対する恋を知っていたのです。私は、こうした恋を為なし得うる、祖母の芸術的な高雅な人柄に、今更のような懐しみを感じて昔の輝くような美貌びぼうを偲しのばすに足る、均齊の正しい上品な、然しかし老い凋しなびた顔を、しみじみと見詰めていました。

# 青空文庫情報

底本：「藤十郎の恋・恩讐の彼方に」新潮文庫、新潮社

1970（昭和45）年3月25日初版発行

1990（平成2）年1月15日第34刷

初出：「婦人之友」

1919（大正8）年8月

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年8月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ある恋の話

菊池寛

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>